

農から見た温暖化

ながれ

佐々木 勝裕 (ささき かつひろ／岩手県一関市在住)

このタイトルは私が岩手県から地球温暖化防止活動推進員の委嘱を受けて間もない2008年頃、数か所で講演したときの演題です。

下水道や廃棄物処理施設の計画や設計の仕事に関わっていましたが、それを切り上げ現住所にJターンし、農業ならぬ農的暮らしを始めたのが1999年4月でした。そのきっかけは1996年から97年にかけての環境新聞に掲載された二人の著名な先生の明瞭な主張でした。一人は当時京都大学の内藤正明教授の「工業化社会への根源的問いかけが必要」、もう一人は当時東北大学の須藤隆一教授の「春の小川」を取り戻せ」でした。触発されやすい私は、即座に農地をさがし、それぞれわずかですが、水田、畑、山林を手に入れ、岩手県最南端の地に暮らすようになってもうすぐ、満21年になります。

カメムシの北上と農薬散布がハチの減少へ

2008年頃の私の講演資料では、2001年から5年までの九州各県の一等米比率がかなり低いことを示し、カメムシが原因の斑点米や高温障害によるものと他人事のように取り上げています。東北でも2003年は冷害ぎみで、収量が少なく品質も悪かったのですが、九州に比べれば大きな差がありました。その後、2010年になると高温により全国的な品質低下、宮城県でも一等米比率が69.2%まで低下し、新聞の記事になっています。この頃からカメムシの北上に伴い、身の回りでも斑点米が出現するようになって、農協では防除剤「ダントツ」の使用を薦めるようになり、昨年まで続いていました。(今年の農薬リストからは削除。)
「ダントツ」使用上の注意には

「ミツバチに対して影響があるので、ミツバチの巣箱及びその周辺にかからないようにして下さい。また、関係機関に対して、周辺で養蜂が行われているかを確認し、養蜂が行われている場合には、関係機関へ農薬使用に関わる情報を提供し、ミツバチの危害防止に努めて下さい。」とあります。実際、10数年前まではたくさんいたミツバチが非常に少なくなり、ぶんぶん飛んでいたクマバチがほとんど見られなくなりました。「ダントツ」にはネオニコチノイド系のクロチアニジンという成分が含まれ、それが原因と考えられているようです。私の“農”は畑では無農薬、水田では必要最小限の減農薬ですので、斑点米には目をつむってきました。また、大農家や法人では最近、色選別機で斑点米を除外するようになっています。

雪不足で「福俵引き」が初めて中止

隣の奥州市旧胆沢町、私がこちらに引っ越す少し前に読んだ本『日本一の田舎宣言』の舞台で、著者は当時の町長でした。北上川の支流胆沢川沿いの広大な扇状地に点在する散居集落が有名ですが、同町では1990年から毎年2月中旬の土曜日「全日本農はだてのつどい」が催されます。移住直後、会場に雪のある冬に私も見物に行きましたが、今年で31回目を迎えます。「農はだて」とは新年の農作業を始める日とされ、つどいのメインイベントは豊作と安全を祈願する「雪上田植え」と「福俵引き」ですが、前者は冬季通行止め区間の国道周辺から雪を運び込み予定通り行います。

しかし、後者は直径2.5m、長さ4m、重さ約8トンの福俵を厄年連が引っ張り、雪

の坂道を引き上げていくため多量の雪が必要なのですが、今年は会場内に雪がほとんどなく、さらに以前の雪不足の際に運び込んでいた同町の西側にもほとんど雪がないため、中止することになりました。俵の上から餅をまくとは言え、“農のこころ”を後世に伝える冬のまつりが雪がないために迫力不足、何とも残念なことです。こうした極めつけの暖冬と雪不足により、広大な扇状地の水田に農薬用水を配る日本一の円筒分水施設に、今年も豊富な水が流れ込むかどうか心配です。

高まる水不足の懸念

奥州藤原三代、秀衡公の家臣 照井太郎高春が企画・開削したとされる照井堰が今に引き継がれ、「世界かんがい施設遺産」に認定・登録されています。その照井堰は北上川支流磐井川から取水し、二手に分かれて西から東へ流れ、一関市街地周辺と平泉町の広い水田を潤し豊かな恵みをもたらしてきました。照井堰を管理しているのが照井土地改良区ですが、地球温暖化対策にも熱心で、堰の途中に3か所の小水力発電所を設けました。最初の発電所は2009年に創設された「東北再生可能エネルギー利活用大賞」の初代受賞となり、2つ目の開放らせん型の発電所も2015年に同賞を受賞しています。

しかし今年、磐井川の源流、栗駒山麓にほとんど雪がありません。雪解け水の不足が見込まれることで、春先以降の作付けが不安視され、照井土地改良区の阿部洋一事務局次長は「例年通り適切な配水ができるかどうか危惧しており、農家の人たちも心配している」と語っています（2月1日付 地元紙）。その後栗駒山の麓、祭時では立春が過ぎてそれなりの降雪があったものの、それも融け、積雪深は平年の99cmに対して22cmです（気象庁HP 閲覧日2月17日）。

育苗期、細菌病多発の恐れ

2月中旬、岩手県病害虫防除所は水稲に関わる細菌病類発生注意報を発表しました。予報の根拠は2019年の出穂期前後の気温が高く、降雨もあって細菌病が感染しやすい条件だったこと、19年産もみのサンプリング調査によると細菌病類の検出率が18.4%で、過去に注意報を発表した12年産の6.3%、18年産の8.2%より高いことを挙げています。そして、仙台管区気象台の3カ月予報で4月の気温が平年並みか高いことも発生を促す要因とされ、育苗施設内での適切な温度管理と有効な薬剤による種子消毒を呼びかけています。

我が家の稲の播種は例年4月10日過ぎ、この注意報を念頭に苗箱を並べるビニールハウスの中が高温になりすぎないように注意しなければなりません。

リンゴ農家、太陽光発電でリスク回避も

縁あって、仙台方面や陸前高田から毎年大きなリンゴふじが送られてきますが、北の産地のものに比べ、どうも色付きが良くありません。教科書通り、温暖化の影響と思われる。一方直接口にする機会は稀ですが、はるかという品種は大きく、とても高級感のある黄色いリンゴです。シナノゴールドは収穫直後にひと手間加えたパリパリのリンゴで5月の連休が過ぎても町内のスーパーで売っていると嬉しくなりますが、それも黄色いリンゴです。黄色いリンゴが多くなったようにこれも適応策の一つかもしれません。

ちなみに、そのシナノゴールドの生産者は気心の知れた友人ですが、彼は数年の間に50kwで低圧連系する3か所の太陽光発電所のオーナーになりました。台風によるリンゴの落果や木がダメになった時のリスク回避が目的と明言しています。